

# 仙台教区報

発行所 カトリック仙台教区事務所  
 980 仙台市本町一丁目2番12号  
 電話〇二二一22一七三七一  
 編集・発行人 三浦 平三

## 司教、贖(あがな)われた者の責任を訴える

### 教区記念日に、特別聖年司教ミサ

贖(あがな)いの特別聖年を祝う仙台教区の公式行事、教区長佐藤千敬司教司式の聖年のミサが、さる6月29日午後6時30分よりカテドラル元寺小路教会で行われた。当日は聖ベトロ聖パウロ使徒の祭日で、仙台教区創設の記念日(カテドラル献堂記念日)にもあつてゐる。ミサは17人の教区司教、宣教師が司教を中心にして共同で司式、仙台や近郊から修道女、信徒ら約五百人が参加、大祝日のように聖堂に溢れる盛況であつた。

### カテドラルに五百人集う

3月25日(神のお告げの祭日)から始まつた特別聖年は、各地区や各小教区教会での各種の聖年行事、そしてまた信徒一人ひとりの実践のうちに生かされてゐるのだが、今回の司教ミサはそれらの頂点に立つもの。司教と一緒に全教区をあげて、キリストの贖いのみ業一九五〇年祭を祝い、感謝するものであつた。また同時に、贖いの特別聖年の意義をあ

らためて認識する機会にもなり、参加者は信仰のよろこびをいつそう強く感ずることができた。

### 「ゆるしの秘跡」に長い列

ミサ中の説教において佐藤司教はまず、特別聖年のお祝いとともに、教区創立記念日、カテドラル献堂記念日、そして聖ベトロ聖パウロ使徒の祭日といくつも重つた今日のごびを表明した。

さらにキリストの贖いのみ業について話したのち、贖われた私たちはこれからどのような信仰生活を行うべきなのか、贖われたものつとめはなになのか、深く考えてほしいと強く訴えた。

特別聖年の感謝のミサは盛大に行われ、ミサの終りに司教が先唱して、教区で作成した「全免償をいただくための祈り」が全員でとなえられた。全免償を得る条件となる、「ゆるしの秘跡」に与る信徒は、ミサの始まる前

にも、そして終了後も告解室の前に長い列をつくつてゐた。

### 神と和解のよろこび

ある人は、長い間気にかけていた告解がやつとできた、とそのよろこびをかくさなかつた。おそらく、長い空白ののち再び神との和解ができて、晴々とした気持で信仰生活を再スタートさせた人もいることだろう。教皇ヨハネ・パウロ二世が今年、贖いの特別聖年を宣言したねがいがあるいはここにあるのかも知れない。

贖い主であるキリストに対する信仰を確実なものにして、それを日常生活の中で生かしてゆくこと。それは修道者や特別な信者だけにとめられることではない。この実践のなかに、司教の訴えにこたえるものがあるのではないだろうか。

### 司教日程(7月14日現在)

- 8月3日 中央協議会財務委員会(東京)
- 8日 教区司祭団役員会(仙台)
- 15日 聖母被昇天会誓願式(青森)
- 20/21日 カトリック医師会(福島)
- 26/27日 カリタス・ジャパン理事会(東京)
- 29日 教区司祭団月例会(仙台)
- 9月3日 白河カトリック幼稚園25周年記念



### '83年目標

小教区教会に  
 キリストの平和を!!  
 (仙台教区)

### パチカン大使ガスバリ大司教 急逝

寿庵祭での説教が最後の言葉になる

駐日教皇庁大使マリオ・ピオ・ガスバリ大司教が6月23日午後10時30分頃、急性心不全のため大使館で就寝中に急逝された。65歳。大使は同月5日、岩手県水沢市の後藤寿庵祭に出席、熱烈な説教で参加者に深い感銘を与えたばかりで、仙台教区の驚きと悲しみは深い。昭和55年10月24日から一週間、仙台教区を公式に訪問されたが、今秋落成する八戸・塩町教会の献堂式に出席することを佐藤司教と約束していた。  
一九七七年11月に着任して6年近く、その

間教皇の訪日という大きな出来事もあり、日本の教会のためにつくされた。熱意の人という印象の反面、きわめて気さくな方で、日本の司教や司祭、修道女、信徒などに心から親しまれていた。在任中の死去ということで、教会内外の人びとからその死を惜しまれた。  
葬儀ミサは6月30日午後3時から、東京カテドラル聖マリア大聖堂で行われ、佐藤千敬

仙台司教ら17人の日本司教団が共同司式、約千人の司祭、修道女、信徒、および関係者が参列した。現職大使の葬儀とあつて中曾根首相をはじめ政府関係者も参列、しめやかなかに荘厳盛大なミサ、告別式であつた。

### 宮城県信徒大会

#### 六つの体験報告で

#### 交流を深める

県下信徒の集いである昭和58年度宮城県信徒大会が、7月3日仙台市の仙台白百合学園で開催された。あいにく朝から土砂降りの悪天候だったが、それでも昨年を上回る五百二十人以上が参加、キリストの平和を、知り合おう、そしてキリストを運ぼうのテーマをかがげ種々の行事をくりひろげた。なお今回から宮城県信徒連絡協議会（会長・新村信雄）が主催することになり、大会の企画運営にあたった。

午前10時開会式のあと今年は始めにミサ、

教区長佐藤千敬司教と共に12人の司祭が共同司式、信徒協賛の深沢守三神父（西仙台教会）が説教をした。大会は一般部会のほかに幼児・小学生、中学生、高校生の部会が設けられ、ミサ後各部会に分かれてそれぞれの集いをもった。

一般部会は始めに佐藤司教の講話。大会テーマの根拠となつている教区の司牧目標、そして今年度のテーマ「小教区教会にキリストの平和を」にふれて実践の工夫を問いかけられた。昼食は例年のように各ブロックに分かれ、信徒同士の交流を促すものとなつた。新しい試みとして昨年の大会以降に洗礼を受けられた方がたの紹介があり、盛大な拍手をもつて迎え入れられた。

午後には交流会。①暁星園奉仕活動（本間重

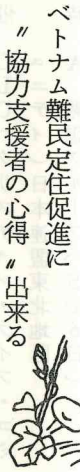
治園長、浦沢光子）②教会会計（青山龍雄）③東北新生園紹介（横田篤三園長）④聖ドミニコ女子修道会の目的と活動（村上武子管区長）⑤鶴ヶ谷カトリック墓地（太田八千代）⑥家庭集会（佐藤健治）。盛り沢山だったが教会のいろいろな面を知るためによい機会となつた。信徒が大勢集めることは、それだけで一人ひとりの信仰を励ますもので、参加者は大いに力づけられ午後4時すぎ終了した。

### 教区修道女連研修会

#### 83人の修道女が参加

6月19日午前9時より仙台市中央公民館を会場に、仙台教区修道女連盟研修会が開かれた。テーマは「贖いと和解」、ドミニコ会のイヴ・ペロー神父が指導。このテーマはいうまでもなく今年の贖いの特別聖年にちなんだもの。第一回講話は救済史を通して示された神の「贖いと和解」。第二回は修道者にとつての贖いと和解の役目。修道者の三誓願とキリストの十字架を現代の中で生きるための信仰の奥義について語った。

今回は講話のあとの分かち合いの時間をたくさんもうけ、講話の理解と相互の交流をはかった。最後に研修会に臨席した佐藤千敬司教とペロー神父の共唱ミサ。神の国のために派遣されている使命を新たにして励むよう、と激励の言葉と祝福を受け、午後4時30分散会した。研修会には教区全域から83人の修道女が参加した。



ベトナム難民定住促進に  
協力支援者の心得「出来る」

ベトナム難民定住促進のために司教団は全  
国対策特別委員会を設けて活動しているが、  
担当司祭会議などで要望されていた「協力支  
援者の心得」が出来上った。これはベトナム  
難民の定住促進活動を行ってゆくためには、  
まずなによりもそのこと自体をより理解する  
ことが先決というところから作成されたもの  
である。仙台教区にも教区事務所にとどいて  
いるので、近々各教会、修道会に配布して、  
難民の定住問題に理解をもってもらおうよう  
に考えている。目次をいれて36ページ。教皇の  
アピールなどではじめに私たちの使命を認識  
し、次に具体的にどんな方法で、支援協力で  
できるかを示されている。そのほか日本におけ  
る定住促進の態勢、難民の定義、インドシナ  
半島の文化や習慣、そして各種の統計なども  
掲載されている。実際には難民の定住促進に  
活動できない方たちにも、この活動がどんな  
ものかを理解していただくことは大切で、で  
きるだけ多くの人に読んでもらいたい。

仙台教区の活動は……

5月25日東京・中央協議会での担当司祭会  
議に出席した結果、仙台教区での難民定住促  
進の活動は間接的な資金援助のかたちをとる  
ことが、もつとも適当のように思われた。教  
区内でのさきのアンケートとも一致した。し  
かし具体的にどうするか、中央での取りきめ  
ははっきりしていない。教区独自で行っても

よいといわれているので、出来れば具体的な  
施設（隣接教区の施設など）への援助という  
ことを考え準備をすすめている。

カリタス・ジャパンから

「もぐらの家」に三百万円贈る

6月28日午後、佐藤千敬司教と本間重治神  
父（カリタス・ジャパン教区担当）は仙台市  
深沼にある心身障害者の共同作業場「もぐら  
の家」を訪れ、カリタス・ジャパンからの援  
助金三百万円を贈った。もぐらの家は心身に  
不自由な人たちの自活の施設で、廃品を利用  
したウエスづくりなど、10人ほどの心身障害  
者が働いている。教会関係者はグループや個  
人で協力しているが、今回は将来計画されて  
いる仙台市折立地内の新施設建設のため、カ  
リタスが援助金を贈ったものである。

四旬節愛の募金額 教区は三百万円

昭和58年度四旬節愛の運動の献金状況がカ  
リタス・ジャパンから発表になったが、16教  
区の総額が6月20日現在で、六千八百九十万  
六千八百三十三円。仙台教区での献金額は、  
三百三万六千五百五十四円となっている。  
なお本年度の仙台教区内へのカリタス・ジャ  
パン援助額は仙台市の「もぐらの家」三百万  
円、特別養護老人ホーム暁星園三百万円、合  
計六百万円である。

郡山教会に天使の声ひびく

5月22日、聖霊降臨の主日。折から郡山市

民会館で公演中だったウィーン少年合唱団の  
一行は、午後4時からの郡山教会のミサに与  
った。彼らは入祭、奉獻、感謝と聖歌を奉仕  
して、聖堂には時ならぬ天使の声が高らかに  
ひびき渡った。

パラン神父の追悼ミサ

さる6月13日カナダで亡くなられたケベッ  
ク外国宣教会の初代日本管区長エウアリステ  
・パラン神父の追悼ミサが、6月20日青森市  
本町教会において行われた。ミサは青森県下  
の13人の司祭が共同でささげ、パラン神父を  
知る多くの信者が集った。

パラン神父はすでに25年前にカナダに帰国  
されたが、終戦後の混乱時代に管区長に就任  
し、青森県内の教会建設や福祉事業のために  
小さな力に精いっぱい力をこめて活動した。  
そうしたパラン神父を知る信者も多く、祭壇  
に飾られた遺影を前に故人の思い出を語り合  
っていた。

仙台百合合 九十周年を祝う

今年で創立九十周年を迎えた仙台百合合学  
園は6月30日、恒例によつて全校生徒が参加  
して聖パウロのミサを行った。佐藤千敬司教  
が不在のため、司教総代理三浦平三神父が代  
つてミサを司式。ミサ後に記念の校内弁論大  
会を行い、中学1年より高校3年までの9人  
が、それぞれ堂々とした弁論を生徒全員の前  
に披露して感銘を与えた。

日本カトリック看護協会

9月に仙台で(第4回)研修会



日本カトリック看護協会は昭和58年度の研修会を来る9月24日、25日、仙台市のホテル紅陽で開催する。テーマは「看護における鍛練と成長」フローレンス・ナイチンゲールに学ぶ。講師は新潟大医療技術短大の真壁伍郎助教。小池田鶴子氏(元日赤教育部長)と寺本松野修道女(聖母病院)がバネラーとなり、昨年の研修会をさらに深め、各自の看護観の根底にながが必要かをさぐるもの。

特別聖年海外巡礼

仙台教区では、特別聖年のための海外巡礼(ローマ、聖地、ルルドなど)を企画しなかつたが、新潟教区の伊藤庄治郎司教様を団長とする次の巡礼旅行を推せんことにした。海外巡礼を希望される方はどうぞ。

期間 10月17日から30日まで(14日間)

費用 五七四〇〇円 定員30人

コース 東京→聖地イスラエル→ローマ→アジジーバ→ルルド。

申込先 東京都港区新橋三の三の九

阪急交通社カトリック巡礼団係

電話〇三―五〇八一―〇一二四

CLC 黙想会

主催 CLC(クリスチャン・ライフ・コミュニティ)日本連盟東北地区

日時 A 黙想グループ(5泊6日)

8月25日19時半〜30日21時

B 通いの黙想グループ(5日)

9月26日〜30日(毎日10時〜15時)

場所 東仙台・光ヶ丘研修所(旧司祭会館) 対象 男女信者18歳以上 求道者も可

定員 A、Bともに20人ずつ

指導 イエズス会イバニエス神父

参加費 A、一万二千元 B、五千元

申込、問合せは仙台市一本杉町一の二聖ウル

スラ修道院シスター梅津

8月31日 申込締切り

映画会

平和の巡礼者ヨハネ・パウロ二世

(女子パウロ会企画、近代映画協会製作)

・同時上映「予言」

(被爆の記録を贈る会 製作)

日時 8月20日 13時、15時、2回上映

場所 仙台市錦町一の一 宮城県婦人会館

入場料 三百円

主催 カトリック正義と平和仙台協議会

第20回

カトリック社研セミナー

日時 8月19、20、21日

場所 横浜市中区山手町 横浜雙葉学園

テーマ 「いま子どもたちの明日を考える」

参加費 四千元

申込先 東京都新宿区北新宿1の33の20

カトリック社会問題研究所セミナー

―準備委員会(03―362―四六五九)



「キリストの平和」をテーマに壮年の人々と話していたとき、救霊というところがさいきんどうしていわれなくなつたのだから、という発言があつた。

もちろん、キリストの平和を身につけるといふことは、福音を実践することで得られるわけで、それが私たちの救いの道つまり救霊にちがいないのだが、発言の意味を次のように理解した。

それは、キリストの平和とか愛ということがよく語られているが、その反面これまで信者生活の中心とされてきたきびしい自己ぎせいや節制、禁欲をとまなつた修徳、そして心静かに祈るといふことが、どうもおろそかになつていゝのではないかと。たしかに、掟にしばられる修徳より、自発的な愛の行為が尊重されるべきだろう。しかし愛や平和といつて寛大になりすぎると、自分の勝手な考えまでもゆるしてしまふことになりかねない。愛さえあればと単純に考え、すべてがゆるされるところするのは賢明であるまい。

各人が自分自身にきびしく正しい信仰生活を送ること、それがキリストの平和を身につける道だと認識したい。今年はまだに生活の刷新の贖いの聖年である。

特別聖年巡礼の旅



青森カトリック教会

贖いの特別聖年と青森市宣教百周年を記念して6月26日、青森市内の信者百六十三人が巡礼の旅に出発した。

行き先は北海道当別のトラピスト修道院、当別カトリック教会、そして青森の教会にとつては母なる教会の函館元町カトリック教会である。早朝4時半に集合、間もなく連絡船出航のドラがひびく。前日までの雨降りが、この日は主の恵ですばらしい天気になった。

約4時間の船旅で函館に上陸、バスでトラピストに向う。一キロほど手前で下車、全員徒歩で巡礼する。この声主にとどけとばかりに聖歌をうたい、ロザリオの祈りをとなえながら一歩一歩トラピストの坂をのぼる。修道院の荘厳なミサに与り感激する。当別教会は丸天井に12使徒のステンドグラス。小さいが心から祈れる親しみやすい教会だった。

函館に戻つて最後の巡礼は元町教会。高い塔がいかに教会らしい。祭壇は左右に脇祭壇をしたがえて立派。大きな十字架の道行きの彫刻画もすばらしいものだった。巡礼団はここで全免償の祈りをする。心をひとつにした祈りは、信仰による兄弟の証しである。帰りの船中是一日の思い出に花が咲き、旅の疲れを忘れさせた。18時間の巡礼の旅に、4歳から80歳までみんな喜びで一杯だった。

「愛は隣人を喜ばせる」

ベトナム難民との交流

小名浜教会 古田繁男



6月3日の夕方、第二集会所で勿来、小名浜、湯本の三教会特別委員会が開かれていたとき、珍しいお客さまがありました。姫路のカリタス・ジャパン難民キャンプから、ベトナム人のグエン・バン・トウエさん、グエン・ルウ・トアットさん、それにトアットさんの長女で3歳になるトルックちゃん、日本語の先生榎賀典子さんと一緒に見えられたのです。

この人たちは一昨年7月、小名浜に上陸したポートビープルの中の方がたです。話をしてみると、当時の人たちはみな元気でキャンプにいたとのことですが、二人は日本に永住する決意をして日本語の講習を受け、就職先も決まったそうです。そこで上陸当時にとっても親切にしていた小名浜の皆さんに、一言お礼がほしいといわさわざ訪ねてきたということでした。

二人の青年は、漂流していたときの記憶を手記にまとめたから読んで下さいと、「生きる」「ポートビープル」と題したガリ版刷りの二つの冊子を差し出しました。難しい漢字をよく使い、表現も正確で、救助された当時の船の写真(ギリシヤの船員が撮ったもの)も生々しく、とても立派なものです。内容をすべて紹介することはできませんが、ベトナム

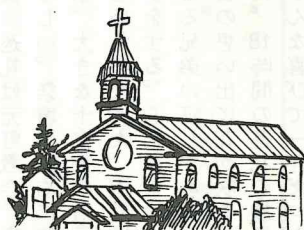
ムノ状況、脱出の決意、そして飢餓と疲労で10人のぎせい者を出した漂流のおそろしさなど、まさに十字架の道です。それでも彼らは失望せず、神に信頼して祈り合い、励まし合つて遂に救助されるまでの心境が、ひしひしと胸に迫ってきます。これは単にペンではなく、心が書いた文章です。

一行は小名浜に3日間滞在し、上陸当時に入院してお世話になつた磐城中央病院を訪れたりしてお礼をのべました。テレビでも放映されましたので、たくさんの方々が毎日来て再会をよろこび合つていました。6月5日には教会の人びとと一緒に、主の聖体のごミサに与り、そのあと坂本准一君の受洗祝賀会にも出席しました。そして信者の皆さんとの再会をよろこび、記念写真を撮り、午後2時の列車で小名浜を去りました。たくさんの人が駅まで見送りました。二人には小名浜教会のモレン神父さんと福祉部からお祝いをさしあげました。

各地の難民キャンプに収容されている者の中で、日本に永住を希望する者は、難民定住促進センターに移り、そこで日本語の講習を受け、就職があつて旋されて定住する。トウエさんとトアットさんはこの講習を受け、日本語教室の優等生として卒業、こんどそれぞれ大阪方面の鉄工、製図関係の会社に就職が決まったそうです。二人は小名浜や教会での親切が忘れられなくてお礼に來られたが、「愛は隣人をよろこばせる」というロマ書(15章)が実感される日であつた。

# おらが教会 (34)

青森・十和田教会



国鉄三沢駅から十和田観光電鉄に乗りかえて、終点の十和田駅で下車。徒歩約8分で、緑色の屋根に十字架が高くそびえているのが十和田カトリック教会です。仙台教区機関紙「炬火(たいまつ)」の旧号に、次のような記事があります。

「明治16年に萬木豊治氏は盛岡より三本木へ商用のため来往したが、当時三本木の素封家三浦万之助氏と親交を結び、時々キリストの奇跡などを物語った。ついに万之助氏は心大いに動き教理の勉強をはじめた。当時青森から植物学者フォリー神父が布教巡回で三本木にこられたので、万之助氏はフォリー神父より洗礼をささがるに至った」

十和田教会出身には萬木(よるぎ)誠三神父がおられます。残念ながら昭和51年に京都教区でお亡くなりになりました。また修道女になられた方もたくさんおられます。

十和田教会はバリ外国宣教会、ドミニコ会(昭和5年)、ケベック外国宣教会(昭和25年)と移管され、昭和29年に三本木教会から

いまの十和田教会に名前が変更されました。現在の主任司祭はマルセル・ポリケン神父様。

さて昨年度を振り返って見ますと、ご復活祭に新役員が選出され、新陣容で信徒会も活発に動き出しました。三浦会長のもとで聖堂の一部と信徒館が立派に改築されました。副会長高橋さんは忙しい勤めの中を教会報づくりにして下さいました。ポリケン神父様の帰国中は、信徒の皆さん、幼稚園の先生方がいろいろ行事に協力して下さいました。

〔圈〕 改築された聖堂で主の昇天の祝日に、戸村翠(みどり)さん、高橋聖名子さんが洗礼を受けました。ご両親も出席された洗礼式でしたが、主のお恵みが豊かに、良い子に育ちますよう心から祈りました。

〔夏〕 ミサ後、みんなで楽しく芝生の草を取りました。7月は信徒会企画の遠足、レヴェイエ神父様など25人が参加しました。幼稚園バスで小川原湖にゆき、海水浴やシジミとり、としを忘れて踊ったフォークダンス等々。日ごろ忙しくて話し合うこともなかったのですが、家庭のこと、子どものことなどたくさん話し合い、親睦の輪をひろげました。

〔秋〕 9月に信徒館で敬老のお祝い会。レヴェイエ神父様や20人以上の参加者があり盛大でした。神父様からはお祝いの言葉と共に、「夜明けと共に」の本が贈られ、希望と感謝の日を過ぎました。

〔図〕 11月の教会バザーはみんなの協力で行いました。手作りアメ、婦人会で作った和紙人形など好評でした。クリスマスミサは聖堂

がいつばい。いつもこんなに集って一緒に祈れたら、どんなにすばらしいことでしょう。

悲しい出来ごととは今年の1月、十和田教会の柱である信徒会長三浦明さんが神に召されたという事です。ほんとうに残念です。

来年は十和田教会の創立百周年にあたります。昭和49年より主任司祭に就任したポリケン神父様は、聖堂、司祭館、信徒館、幼稚園の改装、園庭の整備に寝食を忘れて働いています。いま教会の悩みは、日曜学校の指導者がいないことです。次代を背負う子どもたちの育成ができません。困っています。また種々の都合で教会にこれない信者が、一日も早く共同体と一緒に祈れるよう願っています。

幸いなことに前会長の弟さんの三浦力さんが福山市から転入され、信徒会長に就任されました。信徒一同たいへん心づくよく思いました。主任司祭の指導のもとに、新会長を中心にして、よりよい信者になるよう心がけ、十和田教会の発展につくしたいと願っております。

### 【編集後記】

(増田 ミツ)

8月号を編集している今は7月の中旬。まだ梅雨が明け切らないでいます。司教会議が終り、司教様もやっと帰仙しました。

教区の特別聖年ミサ、宮城県信徒大会と、五百人以上の信者が集った行事がつづきました。教会の一致、神の民の連帯を感じ、信仰生活が励まされました。信者は多くないと何事もサマになりません。やっぱりもつと宣教活動に努めなければ…… (M)